

ガラスの脳

Sleeping Beauty

〔仮題〕

第五稿

原作 / 手塚治虫
監督 / 中田秀夫

脚本 / 小中千昭

Screen Play by Chiaki J. Konaka

99 / 02 / 23

登場人物

飯田 由美 (0 / 6 / 17)
長沢 雄一 (6 / 17 / 45)

溝口 恵子 (17) 雄一 の同級生

飯田 肇 (37 / 54) 由美 の父親 / 貿易商

長沢 律子 (45) 雄一 の母親

斐川 広明 (34 / 43) 武蔵野中央病院医師 (後に院長)

福原 みつ (24 / 41) 看護婦

木内 時子 (46) 婦長

森 勝美 (27) 若い医師

太田 一弘 (17) 雄一 の同級生

佐々木 隆 (17) "

高木 真美子 (17) "

田辺 伊織 (17) "

田所 綱紀 (43) 長期入院患者

飯田 昌子 (26) 由美 の母親

ニュース映画アナウンサー

テレビレポーター 1

" 2

" 3

歩行者天国のアベック男

同 女

赤い荒野

未明。鉛色の空の下に、赤いゴツゴツとした岩が広がる。黒い煙が風に流れゆく。

S「一九五四年十二月 大島三原山」

岩の合間に見えてくる、異物。それは口が開いた旅行靴であり、ジュラルミンの破片であり、息絶えた人の軀。それらは今、等価となってそこにある。

斜めに地面に刺さった垂直尾翼。その近くで、僅かに動く者がいた。

未だ年若い妻。低い呻きを漏らし、彼方から聞こえるヘリの音に空を見上げる。

ずっと庇い続けてきた、臨月近い腹部を両手で抱き、薄らいでいく視界を、ぼうつと見つめ続ける。体の中の新しい命に、自分の最後の見た世界を伝えるかのように――。

ニュース映画

T「帝都ニュース」

A ナ「(甲高い声で)帝都ニュース!」

S「奇跡の誕生」

大島の墜落現場。ニッカポッカの人足達が警官の指示で死体を収容している。

A ナ「三月十三日、大島三原山に墜落したきんせい号は多大なる尊い命が奪われる惨事となりました」

救助される昌子。既に人事不省。

A ナ「極く僅かな生存者の一人、東京都の飯田昌子さんは妊娠八カ月の身重の体でした」

武蔵野中央病院/廊下

泣き崩れる夫の肇と、その親戚。

ア ナ「昌子さんは残念ながら帰らぬ人となりましたが——」

昏々と眠る新生児。

ア ナ「お腹の赤ちゃんは奇跡的に無事誕生。ご家族達は不幸中の幸いと大喜び」

記者会見。壇上の担当医の斐川と、父親の肇。

ア ナ「ところがこの赤ちゃん、生まれてから一週間、二週間が過ぎても一向に目を覚ましません」

沈痛な顔の斐川の脇で、必死にマイクに向かって訴えている肇。

肇 「——お願いいたします。この子、由美の目を覚まさせる医学が、きつとある筈です！ どうか、どうか助けて下さい（机に頭をつける）」

ア ナ「父親の飯田肇さんは、莫大な懸賞金を出す事も考えているとか。赤ちゃんが目を覚ます時はいつの事でしょう」
若い看護婦が、新生児室のケージの中の赤子の世話をしている——。

武蔵野中央病院／外観／午後

緑多き武蔵野の木立。その中に建つ市立病院。

S「一九六〇年三月二五日」

子どもの咳込む声が聞こえてくる——。

同／入院病棟廊下

コンコンと咳する声が移動していく。

パジャマ姿の小学生の男の子が、日課の たんけんをしている。そつとドアを開け、六人部屋を覗く。

入院患者1「お、どの坊主だ」

入院患者2「こっちおいで。みかんあげよう」

サツと出ていってしまふ子ども。

束の間の乱入者に笑いあう患者達。

出てきた男の子、ふと廊下の奥を見る。薄暗い廊下の突き当たりの部屋――。

男の子「――」

ドア前に近づいてきた男の子。ただのドアなのに、それは重々しく彼の前に立ち塞がる。

奥の病室

ギツ。ドアを開けておずおすと顔を覗かせる男の子。男の子「――！（息を呑む）」

薄く開かれた窓がレースのカーテンを揺らし、ベッドに幻想的な光が差し込んでいる。硬直した様に見つめる男の子。

ベッドの上には、天使の様に眠り続ける、幼い少女。ベッドサイドのテーブルには、父と母の写真――。

男の子「――眠っているの……？」
――歩踏み出そうとした時――

女の声「くら、雄一君」

ハッと振り向く雄一。
年若い看護婦・みつがニヤニヤと笑い後ろに立っていた。

雄一「ぼ、僕――（いきなり咳き込む）」

みつ「ほらほら、だから――」

雄一の手を引いて部屋を出ていくみつ。
その音にも、少女は目覚めない。
手を引かれた雄一、その顔を見つめ――

雄一の病室

ベッドに腰を下ろし、シロップ状の薬を飲む雄一。

みつ「あそこは開かずの間だから入っちゃだめ、って言うてたでしょ」

雄一「――起こさなかったもん、僕」

みつ「——（小さく嘆息）あの子は起きないわ。眠り姫だもの」
雄「ねむりひめ？」
みつ「由美ちゃんね、生まれてからずっと、起きた事が無いの。ただ眠っているだけ……」
雄「——うそだよ、そんなの」
みつ「——本当なのよ」
雄「——」

武蔵野の木々

午後になって、風が和ぐ。

児童遊戯室

雄一より年下の女の子が数人、人形遊びをしている。
雄一はつまらなそうに、玩具箱の横の小さな書架の前へ。

雄「——」
ペロー作『ねむりひめ』の背表紙が見える。
絵本をとってめくる雄一。

壁に寄り掛かって絵本を読み耽っている雄一。
窓の外は傾きつつある陽光。
雄「——（つぶやく）『王子様のくちづけで、お姫様は目を覚ましました』……」
顔を上げる雄「——」。

廊下

開かずの部屋 に向かつて、ゆっくりと歩いていく雄一。咳の発作が来るが、口を必死に抑え堪える。

由美の病室

ドアを開け、入ってくる雄一。カーテンは閉じられ、薄暗い室内。

ゆっくりと眠れる由美に近づいていく雄一。

ベッド脇に立ち、怪訝そうに由美の寝顔に見入る。

『じゃあ、ぼくが起こしてあげる』

そつと由美の顔に自分の顔を寄せていく雄一。

薄く開いたままだったドアから、看護婦のみつが覗いていたが――、微笑し、そつと立ち去っていく。

顔を上げる雄一。由美は眠ったまま。

雄一「――僕が、王子様じゃないから……？」

武蔵野の木々

少し、風が強まる。

病院廊下

咳を堪えて、雄一、開かずの病室へ向かって歩いていく。

それを見送る――、担当医の斐川。ぼうつと雄一の背を見ていたが、関心を失い歩きだす。

由美の病室

ベッドの由美に近づこうとした時、喘息の発作が出てしまう。猛烈な咳をしてうずくまる雄一。由美が起きてしまわないかと（矛盾だが）動揺。ややして看護婦のみつが飛び込んでくる。

みつ「こらっ。ちゃんと病室でおとなしくしてなさい。もうすぐ退院だって先生にも言われてたのに」

みつの手に引かれて出ていく雄一。

雄一の視線に気づき――

みつ「由美ちゃんは、ここでお祭りしたって覚めないわ」
雄一「――」

病院玄関

母親の律子が看護婦みつに頭を下げている。その横で、入院病棟の方を見ている雄一。

以下の台詞はオフ気味に

律子「——大変お世話かけまして」

みつ「(ケラケラ) ホント、お世話しがいのある子でしたよ。

雄一君、よかったね、学校始まる前に退院出来て」

雄一「——うん」

バス車内

最後部席で後ろ向きに座り、武蔵野の木々が流れいくのを見つめる雄一——。

病院前/数日後

玄関には『本日休診日』の札。

その前を過る、小さな影。

病院裏手

デートでもあるのか、余所行きのスーツ姿、化粧をしたみつが看護婦住居棟から出てきたところ。

入院病棟に向かって走る小さな人影を見て——

みつ「?……」

由美の病室の外側

見回しながらやってきたみつ、ふと背後の窓が気になり——、中を覗く。

みつ「!——(微笑)」

由美の部屋

眠り姫の顔に唇を寄せて――

雄一「僕が王子様だよ……」

そっと口づけをする雄一。

数カ月後／バス車内

いつもの様に、最後尾に後ろ向きに座って窓外を見ている雄一。

数週後／病院前

雨の降る中を、黄色い傘を差して駆けて来る雄一。

雄一のキスのモニタージュ

キス、キス、キス……。天使のその様に、無垢な行為――。

7

しかし――、由美は目を覚ます事は無い。

日曜日に訪れる雄一。それを優しく見守るみつ。そして、無表情に黙認する斐川――。

由美の病室

雄一「――僕が王子様だよ」

口づけを終えて、そっと立ち上がる雄一。
と、背後から声。

斐川「（オフ）君は王子様じゃ、ない」
ハッと振り向く雄一。

白衣のポケットに手をつ突っ込んだ斐川、無気力そうな顔で雄一を見つめていた。

斐川「――（子どもに言う口調ではなく）手は尽くしたんだ。

いつも海外の学会からも文献を集めてきたし、新薬のサンプルは真つ先に持って来させてきた――。

でもこの子は目覚めない……」

雄一「(乾いた声) ひかわ、せんせい……」

斐川「(虚ろに) まあそれも、失踪したこの子の父親が病院に残した金のお蔭なんだがね……。今でも毎月、日本のどこかからか、微々たる金を送ってきているよ……」

雄一、由美を見る。

斐川「君は誰に祈って口づけをしていたんだ？ 神様か？

この世に生まれながら目を覚まさない、そんな残酷な運命をこの子に与えた神に祈るのかい？ (声無き嘲笑)」

雄一「――」

ダツと駆け出ていく雄一。

斐川「――(自己嫌悪)」

武蔵野の林

キスを見られた羞恥と、理解出来ない悪意。雄一は混乱している――。

ゴオオオツ。風が起こり、木々を揺らす。

駆け抜けていく雄一を覆わんばかりに――。

鷗華高校/校庭

S「一九七一年一月二二日」

都下の住宅地に建つ市立高校。下校時刻で、生徒達が校舎から吐き出されていく。寒い季節。マフラーをした生徒が多い。

下駄箱から乱暴に飛び出し――、校庭に飛び出る少年。先に出ていた友達に向かっていく。

と、頭上から女子の大声で呼ぶ声。

女の子「ゆーいちーッ！」

振り向き、校舎二階を見上げる高校生となった雄一。

雄一「えーっ？ 何ー？」

女の子「今日は代表委員会だろーっ」

雄一「(しまったという顔)——俺、今日早退！ 腹痛くて」

拝む仕種をして校門の方へ駆けていく雄一。

一弘、隆ら友達が雄一を小突いて迎える。

二年B組教室

窓から見下ろしていた恵子、嘆息。

恵子「なら保健室で寝てろっつーの。サイツテー」

背後から女子が来てくすくす。

真美子「説得力無いって。雄一君が保健室で寝てますなんてさ」

伊織「恵子がちゃんと見張ってないよね」

恵子「(ムツ)なんであたしがあいつをいちいち見張んなきゃ
 なんないんだよ」

伊織「だーって、ねー」

くすくす笑いながら顔を見合わせる真美子と伊織。

恵子「(懨然)……」

住宅街の道

一弘、隆とアイスバーを食べながら歩いている雄一。

一弘「——雄一よー、放課後どうせ暇なんだろ？」

雄一「え？」

一弘「どうせ代表委員だって溝口に全部押しつけてんだろ？」

雄一「何だよ」

隆「鈍い奴だな。一弘はな、ラグビー部入って下さい、って
 お願いしてんだよ」

一弘「(むっ)お願いなんてしてないぞ」

隆「そうかぁ？」

雄一「考えとくよ」

一弘「またそれが」

隆「雄一はな、別にラグビーなんかやんなくても女子には人
 気あるもんな」

雄「(ぶつぶつ)女子の人気の為にやってんのかよ」
隆「78パーセントはそうだ(断言)。そう言やさ、雄一が誰が好きだとか、聞いた事ないな」
一 弘「! そうか!」
雄「な、何」
一 弘「雄一、溝口が好きなんだな? 好きなんだろ?」
雄「はああ?」
隆「(苦笑)溝口恵子か。うむ、確かによく隣の席になってるよな」
雄「偶然だろ、そんなの」
一 弘「好きなんだろ? 好きって事にしとけ」
雄「なんだよそれ」
隆「雄一に決まった彼女がいれば、ラグビー部の星のこいつにも、もっと女子の関心が集まるって計算だ」
雄「(呆れ果て)」
一 弘「(厳しく)隆」
隆「お?」
一 弘「サツと隆に握手を求める一弘。お前は男の気持ち判る真の友だ」
苦笑する雄一と隆

公団アパート

十棟程が建つ団地。雄一が帰宅してくる。

長田家

鉄扉を鍵で開け、無言で入って来る雄一。食堂のテーブルに鍵を投げ、テレビのスイッチを入れてから自分の部屋へ。
テレビにはCM(当時の)が流れている。
自室に鞆を置いてきた雄一、テレビには一瞥もくれず冷蔵庫に向かう。
ゴソゴソと中を物色している雄一。

画面内司会者「(オフ)——では、今日の昭和の出来事のコーナーです。まずはこのニューウズ映画から御覧下さい」

テレビに、モノクロの古いニューウズ映画が映るが、雄一は無関心。魚肉ソーセージを見て、食べようか
思案中。

画面内アナ「帝都ニューウズ！」

画面には——、三原山旅客機墜落事故の映像が——。
アナ「三月十三日、大島三原山に墜落したきんせい号は多大なる尊い命が奪われる惨事となりました。

極く僅かな生存者の一人、東京都の飯田昌子さんは妊娠七カ月の身重の体でした」

記者会見。壇上の担当医の斐川と、父親の肇。

アナ「ところがこの赤ちゃん、生まれてから一週間、二週間が過ぎてても一向に目を覚ましません」

ん、となる雄一。ふとテレビの方に振り返る。

肇「——お願いいたします。この子、由美の目を覚まさせる学が、きつとある筈です！　どうか、どうか助けて下さい(机に頭をつける)」

アナ「父親の飯田肇さんは、莫大な懸賞金を出す事も考えているとか。赤ちゃんが目を覚ます時はいつの事でしょう」
眠り続ける、赤子の姿——。

雄一の目、徐々に見開かれていく。

瞬間、赤子の唇が雄一の網膜に大写しになる。

雄一は目眩を感じた。

雄一「——(徐々に、目を見開く)」

テレビ画面は、落語家の司会者の顔に。

司会者「このお嬢さんは十七年目の今日に至るまで、未だ眠り続けているのだそうです。現代の医学が進歩したといってもまだまだ人間は自分自身の体の事すらも判らないのですね。むなしいです(必要以上に深刻に)」

胸が苦しい。息をするのも痛い。視線を逸らそうとするも、テレビを凝視する事から逃れられない。

画面内アシスタント「(オフ扱い)さあ、ここで今夜のお惣菜の

コーナーです。高橋先生に、今日もポイントのところ、是非教えて戴きましよう。先生、どうぞよろしく」

雄 — 「——ずっと——、十七年——、俺——」

公団アパート

建物から飛び出していく雄一。

バス車内

郊外に向かって走るバス車内。空いているが、立つて吊り革に掴まる雄一——、ふと最後部席に目を。

雄 — 「——」

そこには、十一年前の、小学生の雄一がこちらに背を向け、窓外の、徐々に緑多い景色を見ている。

雄 — 「（小さく呻く）」

目を逸らす雄一。

最後部席に、子どもの姿など、無い。

武蔵野の林

小走りに進む雄一。

やがて見えて来る——、武蔵野中央病院。

雄 — 「——」

玄関から出てくる外来患者。雄一、ここに来た事やや後悔している。ここに来てどうしようというのだ。自分が小学生の時にした事はただの——

雄 — 「『違う』！」

同内／待合室

やや古びた印象。こんなに小さい病院だったか？
見回しながら進む雄一。

入院病棟廊下

かつて 日課 だった廊下の徘徊。壁の手すりに掌を這わし、ゆっくりと進んでいく。やがて見える、突き当たりの部屋。由美の病室。

雄 — 「——」

閉じられたドア。その前に立つ雄一。高鳴る動悸。しかし、ここまで来たのだ。ギツ。扉を開く。

由美の病室

雄 — 「！」

花の中の乙女——。小さく嘆息する雄一。花瓶に生けられた花束や花卉類の鉢がベッドの周りを覆い尽くすが如き。

雄 — 「——」

暫し立ち尽くす雄一。しかし——、ゆっくりと歩き出して由美のベッドに近づく。ああ——、こんなに美しく成長していたのか……。穏やかな表情で眠り続けている由美。跪いて由美の顔に近づく雄一。

雄 — 「——ぼく——（乾いた声）が……」

ガチャツッ！ ドアの音が背後からして——
看護婦の声「誰ですっ!？」

はっと振り向きうるたえつつ立ち上がる雄一。

雄 — 「あっ、あの——」

みつではない、中年の婦長・時子が険しい顔で睨む。婦長「この病室は院長先生の許可が無い者は立ち入り禁止です。出ていかないと警察を呼びますよ」

雄 — 「……」

廊下

看護婦と歩く雄一。

婦長「——テレビなんかでやるから……」

雄一「あの、福原さん、って看護婦さん、いませんか」

婦長「（怪訝）え……？」

雄一「お世話になったんです。僕、小学校ン時喘息でここ、入院してて……」

婦長「（含み有り気）福原さんは、もう随分前に辞めました」

雄一「（がっかり）——」

立ち止まり、由美の病室の方に振り向く雄一。

雄一「——」

婦長「（オフ）院長先生。山下さんの投薬なんですけど——」

声に前を見てギョツとなる雄一。

婦長、向こうから来た男に足早に近づき、検診票を見せつつ何か告げている。

雄一「斐川先生が——、院長……」

斐川、無表情に看護婦の言葉を聞いていたが、ふと雄一を見て——、僅かに目を細める。

雄一、サツと目を外し——、立ち去る。

バス車内/夜

人の少ない、町へ向かう車内。雄一はぼうつと暗い窓外を眺めつつ——、無意識に自分の唇に指を触れさせる——。

長田家/公団アパート内

ボタン。鉄扉を開けて入って来る雄一。

食卓では母親の律子が一人、夕飯を食べていた。

雄一「（元気を装いノ『ただい）まっ」

さっさと自分の部屋へ向かう雄一。

律子「（おかえ）りっ」

雄一、部屋の中で制服を脱ぎ始める。

律子「——ご飯は？」
雄一「まだ」
律子「（嘆息）しまった……」
雄一「（出てきて）何が」
律子「ま、食べ盛りなんだから、何でもお腹入ればいいよね」
雄一「（ヤな予感）また一人分つきや作ってないな？」
律子「だって残したらもったいないし」
雄一「また納豆と玉子焼きだけか」
律子「栄養はある。文句言わず食え」
雄一「（律子の皿を覗き）汚ねー、自分だけ、あー旨そ」
わざとらしく舌なめずりしかけて——、ハツとなる
雄一。律子に背を向け——、そっと自分の唇を指で
触れてみる。
律子「？ どしたの」
雄一「（うるたえ）なんでもないっ。早くメシっ」

鷗華高校／三年B組教室／翌日午前

退屈な授業中。雄一の席は窓側。隣に恵子。
ぼうつ、と窓の外を眺めている雄一。無意識に指を
唇近くに——。

ふと雄一を見る恵子、まぶしそくに目を細める。

恵子「——（顔と声を作り）忘れたの？」

雄一「えっ……」

恵子「教科書」

雄一「『あ……』」

机下から教科書を出し、開く雄一。

雄一「——どうして、忘れてたんだろ……」

恵子「え？」

雄一はじつと思案——。

頭の中がぐしゃぐしゃになっている。どうすべき？
どうしたい？ どうしたらいい——？

バス車内

空いた車内の中で、吊り革に掴まる雄一。
なにをしている？ なにをしようとしている？

入院病棟廊下

看護婦が出入りする脇の出口からそっと入る雄一。
見回し——、奥へ！

廊下／由美の病室前

またそこに来ている自分。しかし、もう迷いはない。
ノブに手を——

由美の病室

花の中の乙女——。昨日と全く同じ姿でそこにいる。
雄一、そっと由美のベッドに近づき、跪く。

雄一「——目を、覚まして」
緊張で胸が破れそうな程。雄一は目を閉じて——、
自分の唇を由美のそれに触れさせる。
ゆっくりと目を開ける雄一。

由美は眠ったまま——。

雄一「——僕が——（『王子様』、が言えない）」
窓の外には、風が揺らす木々——。

長田家／ダイニング

レース編みしながら『ありがとう』を見て（聞いて）
いる律子。ふと雄一の部屋の方を振り向く。
ラジオを聴いてるらしく、ポップスの音が小さく漏
れている。

律子、「ごきげんそうね……」と微笑。

鷗華高校校庭

終業のチャイムが鳴り――

校庭に飛び出す雄一。

隆 「雄一ーッ！」

雄一 「（振り向かず）ごめん！」

一 弘 「友情を大事にしない奴は早死するぞーッ」

後から談笑しながら出てくる恵子達。

恵子 「『あ……』」

校門を駆け出ていく雄一の後ろ姿。

真美子 「なんか最近さ、雄一君、毎日すぐ帰るよね」

伊織 「バイトしてんじゃない？ 知ってる？ 恵子」

恵子 「なんであたしがあいつの事いちいち」

真美子 「（くすっ）んなムキになんなくても」

恵子 「ムキになんてなってないでしょうがっ！」

真美子と伊織、クスクス笑う。

由美の病室

キス。静かな、ほんの短い、キス――。

武蔵野中央病院 / 裏側

そつと廊下から出てきて靴をトントンと突っかけながら出てくる雄一。

やや離れたところから、それを斐川が見ている。

雄一は斐川に気づかず、走り去っていく。

斐川「――」

雄一の部屋

ラジオからDJの喋りが低く流れている。

分厚い参考書を開き、勉強中の雄一――、集中出来ず、ベッドに倒れ込む。

由美の病室（モニタージュ）

キス――

キス――

キス――

徐々に室内の花瓶、鉢植えが減っていく。

雄一の部屋

ぼう、っとベッドで仰向けになり、天井を見ていたが、ふと壁のカレンダーを見る。

雄一、ブツブツ言いながら、指を折って数えるが、やめる。その数が多いのか少ないのか、今の雄一には判らない。

三年B組教室／春

窓の外、青々しい木々の葉が風にそよぐ。

終業のチャイムが鳴った。

女生徒「きりーっ、れーい」

出ていく教師。バタバタと片づけ始める生徒達。

雄一、鞆にノート類を無造作に突っ込み、席を立つ。

雄一「じゃあな」

恵子「！」

廊下へ階段

教室から出てきた雄一、階段を降りようとすると――

恵子「雄一！」

四、五段、降りたところで振り向く雄一。

雄一「あ？」

恵子「今日はちゃんと代表委員会出なつて言ったでしょ！」

雄一「え、俺出るつて言ったっけ……（思案）」

恵子「クラスで選ばれたんだから、出たいとか出たくないとか
じゃないでしょ！」

雄一「でも——」

と、ドヤドヤと教室から出てくる生徒達。

一弘「雄一い、たまには溝口の言うこと聞いてやれよ」

真美子「そうだよー、恵子が可哀相だと思わないの？（揶揄）」

雄一「（当惑）ええつと……」

階段の上と中途。注目を集めている恵子と雄一。

恵子、恥ずかしい。

伊織「出なよ雄一君」

隆「逃げる雄一！ 体制にへつらう事ないぞ！」

女子にバシバシ叩かれる隆。

女子たち「何言ってるのよこいつ（など）」

隆「いててて」

わいわいと騒いでいる生徒達。

恵子「——（背後を気にしつつ小声で）早く来なって」

雄一「俺……」

恵子「（羞恥に腹立たしさが加わり）みっともないよ！ 早く

行こうって」

無意識に手を差し伸ばす恵子。

生徒たち「おおー！」

ハツとなって手をすぐ引つ込める恵子。

雄一、目を伏せている恵子を見つめ——

真美子「ほら、早く手をとりなつて！」

ドン、と背中を押す真美子。

恵子「『あつ』」

バランスを崩し——、階段に向かって——落ちてい

く恵子。

押した真美子ら、愕然。

雄一「！」

すんで抱きとめる雄一——。そのまま勢いで——

恵子と雄一の唇が——重なる。

一瞬静まった生徒たち——、急に騒然！

サツと雄一の腕から逃れる恵子。

— 弘「したよなっ？ 今、雄一と溝口、キスしたよなっ」
伊織「うそーっ」

真美子「（心配そう）——恵子……？ ごめん、大丈夫？」

背を向けている恵子——、唇に指を当てて——。

雄一「——溝口……？」

恵子、突如泣きだす。

静まる生徒達。

雄一「——」

恵子、階段を駆け降りていく。

真美子「恵子……。あ、あたし——」

恵子の後を追う真美子、続く伊織。

雄一「——」

公団住宅ノ雄一の部屋ノ夜

雨が降っている。

ぼうつ、と窓を伝う雨を見つめている雄一。

鉄扉が開く音がして、律子が入って来る。

雄一の部屋を覗く律子。

雄一「（おかえり）」

律子「（ただい）ま」

律子、買い物してきた物を冷蔵庫に仕舞い始める。

雄一——、そつと唇に指を——。

キスをしたのか？ 俺は。

まだ由美を目覚めさせてもいないのに——。

いたたまれない気持ち。

一人、食卓でビールを飲んでいる律子。外交先で自分の良く無い事があつたらしい。

と、上着を着ながら部屋から雄一が出てくる。

雄一「今から出かける」

律子「——ちよつと」

ボタン。

律子「（思案）——親に秘密持つ様になつたと……（苦笑）」

コップのビールを飲み干す律子。

終バス車内

夜の雨の中を走るバス。

雄一は酷く焦っている。

遠くで雷鳴が轟く。

武蔵野の林

傘など役に立たない程、横殴りに降る雨。

雄一は走る。

見えてくる――、武蔵野中央病院。

稲光が走り――、激しい雷鳴。

由美の病室

ずぶ濡れの雄一がドア前に立っている。

窓から稲光が時折強い光を放つ。壁の時計は〇時になろうとしていた。

雄一「――」

ベッドに近づく雄一。

雨に濡れた雄一の顔は、僅かに震えている。

今夜のキスは特別だ――。

跪き、そつと由美の顔に近づく。

雄一、由美の上半身を抱え、起き上がらせる。

雄一「（乾いた声）王子様のキスで、お姫様は目覚めました」
無意識に腕で自分の唇をゴシゴシと拭い――由美に

口づける。

長い、長いキス。

そつと顔を上げる雄一。

稲光に浮かぶ、青白い由美の顔。

雄一「――」『やっぱり駄目なのか』……、？

雄一「——え……」
いつも穏やかな表情だった、由美の顔がおかしい。

雄一「——うっ……」
苦悶が僅かに由美の眉を顰めさせている。

雄一「——うっ……」
ヨロヨロと立ち上がる雄一。

雄一「わわ……、わわ……」
由美のまぶたが、ゆっくりと——、開いていく！

雄一「わわ……、わわ……」
後退っていく雄一。

ドドーン！ 近くに落ちる雷鳴。

激しい稲妻が由美の顔を照らす。

目を覚ました。じっと天井を見上げている。

雄一「わああああっ！」

雄一、激しくうろたえながら、よろける様に部屋を飛び出していく。

由美「……」

由美の病室 / 数十分後

明るく照明がつけられた室内。数人の看護婦が由美の周りを囲んで血圧、心電図計測の用意。

若い医師はペンライトで由美の瞳孔を見ていた。

その後ろで緊張した顔で立つ雄一。

婦長「(オフ)ちよつとそこ邪魔」

雄一「——」
あ、と退く雄一の脇に、点滴器具を載せたワゴン。

雄一「——」
雄一はひたすら由美の顔を見つめている。由美は、まだ自我を認識していないのか、ぼうつと室内を見回していたが——、雄一を見る。

雄一「(ドキッ)」

若い当直医、カルテを見ながら

当直医「——正常値です……。院長先生、蛋白同化ホルモンの投与は2ミリでいいですか？」

雄一のすぐ後方に立っていた斐川、冷徹に

斐川「何を勉強してきた」

当直医「す、すみません。（婦長に）あの——」
婦長「（冷淡に）２ミリで正解です」
当直医「（安堵）すみません」

若い看護婦が注射器の準備。
雄一の方を見つめ続ける由美。

雄一「——」

サツと雄一の背後から出ていく斐川。

それを目で追う由美。と、由美の腕がまくられ、看護婦が注射針を当てる。

それを凝視していた由美——、いきなり泣きだす。

由美「わああああん！ わあああああん！」

婦長「はい、泣かない泣かない」

由美「わあああああん！」

武蔵野中央病院 / 外観 / 翌朝

S「一九七一年四月二三日」

S「一日目」

入院病棟廊下

医療機器を乗せたワゴン等が次々と運び込まれ、看護婦達が慌ただしく行き来している。

入院患者たち、怪訝そうに見守っている。

ロビー

独り、ポツリと待合室の椅子に座っている雄一。

雄一「——（ポソリと）目が、覚めた……。覚ましたんだ……。嬉しさがこみ上げて来る。」

由美の病室

俄にICUの如き様相。各種医療機器がベッドの周

りを囲み、由美の腕、額等にはコードが貼り付けられている。

慌ただしく動く看護婦達をキョトンと見ていた由美、ふと傍らで機器の計器を見ていた医師のポケットから垂れ下がる聴診器に手を伸ばし、引っ張り——
ゴムチューブをかじる。

若い医師「あつ、こちらこちらっ」

婦長「本当に赤ん坊だわ……」

窓の外

雄一、外から中を覗いている。

昼休みらしく、今は看護婦も誰もいない。

と、いきなり背後から

男の声「せっかく目が覚めたのに、あれじゃあモルモットだ」

ギョツとなつて振り向く雄一。

パジャマ姿の入院患者・田所が煙草を吸いながら立っていた。

雄一「モルモット？」

田所「二十年だっけ？ ずっとあそこで寝てたんだ。目が覚めたんなら外、出してやりゃいいのに」

煙草を思いつきり吸う田所——、ふらっ。

雄一「だつ、大丈夫ですかっ！」

田所「ばかつ、（見直し）シツ。違うよ、昼休みしかヤニ吸えないからさ、立ちくらみ（ニヤ）」

雄一「——（安堵）なんだ」

田所、煙草をサンダルで掘った穴に落として踏み、裏口に向かって歩いていく。

雄一、木立を見上げる。

日差しは午後のそれに。

雄一「——」

由美の病室

見上げる由美。

そつと入ってきた雄一、由美の手をとる。

雄一「立つんだ。外に行こう」

由美「……と……？」

雄一、力を入れて由美を引っ張る。

由美「あう……」

ベッドから落ちる由美。

雄一「ああっ」

激しくうつろたえる雄一。

由美、赤子の様に見える雄一について動く。

雄一「——まだ立てないのかあ……」

窓外を見る雄一。

武蔵野の林

由美「うわう、あわわふー」

緑の中を見回し、歓声を上げている由美。背負っているのは雄一。

雄一「何言ってるんだか判らないけど——喜んでんだよね」

由美「わうー！」

雄一「ずっと、十七年も夢見てたのかい？」

体を揺らしてはしゃぐ由美。

雄一「結構長かったんだぜ、十七年って」

由美「しゅす、つつつ」

雄一「外の空気、全然違うだろ？」

高台の公園

林を抜けると——、視界がワツと開ける。そこは高台に作られた公園。

由美「！ ううー！」

大きく体を揺らす由美。

雄一「ななっ、何だよ急に。——え？ 降りたいの？」

仕方ない、と由美を下ろす雄一。

カクン、と膝をつく由美。しかし——、ゆっくりと立ち上がるとしている。

雄一「由美……」

思わず手を差し出そうとして——、サッと引つ込める雄一。由美が、自分の力で立とうとしているのだ。由美「（やや辛い）くっ……」

地面をしつかりと、裸足で踏みしめ——、由美は立ち上がった。

その懸命な姿を、見続ける雄一。

由美「く……、うう……」

立ち上がり——、歩きだす。

雄一「……」

公園の突き当たり。ちよつとした展望台の様に、そこから町並みを見下ろす事が出来る。

そこに向かって歩いていく由美。

景色の全てが、今の由美には広大で、新鮮な世界。空を仰ぎ、手を広げ、一歩づつ前に歩いていく由美。

雄一「（咳く）そうだよ。これがホントの世界なんだよ」

由美「（わあ……）」

柵の手すりに近づく由美。大きな空——、そして、眼下に広がる小さな町並——。

雄一「（苦笑）あんまり近づくと落っこちるぞ」

それを聞いてか、ふと目を下に移した由美——。

由美「——」

由美の顔から笑みが消え——

雄一「どうした……？」

由美、顔をくしゃくしゃにして泣き始める。

由美「わああああん、わああああん」

雄一「（うるたえ）なっ、どっ、どうしたんだよ急に……」

大声で泣きわめく由美。

どうしたらいいのか混乱している雄一。

雄一「どうしたらいいんだよこっちは……」由美！ 由美……

と、公園入り口の方から白衣を着た者達が。

婦長「（遠くオフ）いたわ！」

雄 —「！」

婦長と男性看護師二人、駆けて来る。
やや安堵する雄一。しかし——
未だ由美は泣きじゃくっている——。

公団住宅ノ雄一の部屋ノ夕刻

鍵を自分で開けて入って来る雄一。
律子はぼつとテレビを見ていた。

雄 —「——ま」

律子「おかえり」

雄 —「——ただいま」

律子「他に言う事、ないの？」

雄 —「え？」

律子「——ま、いいけどね……。あたし嫌いなんだ、友だちみたいに何でも話せるなんていう親子関係」

雄 —「じゃあいいじゃん」

律子「良かない。せめて無断外泊の言い訳ぐらい考えときなさいよね」

雄 —「——いろいろあったんだ——（思い出し）本当に、色々……」

律子「——（何だか安堵……）」

由美の病室

暗く照明が落とされた部屋。
ベッドに横たわる由美。しかし——、由美は決して目を閉じる事なく、天井を見つめていた。
考えている——。独り、考えている——。

児童遊戯室ノ翌朝

S「一九七二年四月二四日」

小さい子どもが遊ぶ脇で、うずたかく絵本が積みまれ

ている。

S「二日目」

由美、ペタリと座り込んで次々と本のページをめくっている。単に文字を追うだけでなく、描かれている絵も目に一枚一枚焼き付けているかの様。

ふと、猛烈な読書に厭き、傍らの子どもに目をやる。クレヨンでスケッチブックに絵を描いている子ども。

由美「——（見つめ）」

由美の周りに散乱する画用紙。凄まじい勢いで絵を描いている。最初の頃はただの描き殴りだったが、徐々に線がしつかりしていき——、人の顔に。

森「（感心）——凄い吸収力だ。（苦笑）まるで十七年の口スを取り戻そうって感じだな」

若い看護婦らを連れ回診していた斐川が来る。

森「あ、斐川先生。見て下さい！ 飯田由美は凄いですよ。もうこんな絵を描けるようになって——」

絵を見せる森。

斐川「（低く呻く）あり得ない……」

森「？ どうされました？」

斐川「この子は見ていない筈だ……」

森「——、これ、誰なんです？」

それは紛れもなく——

斐川「飯田肇。由美の父親だ」

森「い？」

鷗華高校理科室／午後

遮光カーテンが閉められ、科学映画（脳の働きを図解する内容）を見せられている生徒達。

僅かに開いたカーテンの隙間から、ぼうつと外を見ている雄一。苛立たしげに鉛筆を机に開いた穴に突き刺している。

その雄一をやや離れた席で見ている恵子。

映画が終わった。前の方の席で疎らに拍手。カーテンが開けられ、眩しそうに外を見る雄一。

理科教諭「（苦笑）感動的な映画だったな。今拍手した奴は感想

小論文を書いて提出」

えーっ……と声を上げる生徒達。

日 長「きりーっ。れい」

恵子、ふと見るともう雄一はドアの方に走っていくところ。

恵子「——」

真美子「（おずおずと近づき）恵子お……」

恵子「（虚を衝かれ）え」

伊 織「真美子がさ、ちゃんと謝りたいって」

シュンとしている真美子。

恵子「いいって別に。あんなの——」

真美子「良かった。ね、後でさ、買い物一緒に行こう？」

恵子「——（笑みを作り）うん、いいよ」

武蔵野中央病院／ロビー

おずおずと入って来る雄一。昨日の失態が、彼の足を重くしている。

ロビー脇の赤電話では、入院患者の田所が誰かと電話で話している。

田 所「——そうなんすよ！一七年ぶりに目が覚めた。こないだおたくのワイドショウでやってたじゃないですか——」

雄一、その脇を抜け廊下へ。

由美の病室

無人。「え？」という顔の雄一。

児童遊戯室

百科事典や大人向けの雑誌などが床に散乱。

由美は小首を傾げて洋装雑誌をめくっていたが――
雄一が来たのを見てパツと顔を輝かせ

由美「ゆーいちー」

雄一「『えっ?』」

由美、立ち上がった雄一の方に来る。

近づいて来る由美の、眩しい笑顔。

思わず目を逸らしてしまう雄一。

若い看護婦「ずっと由美ちゃん、待ってたのよねー」

由美「ゆみ、まってたー」

雄一「言葉、しゃべってる……」

由美「しゃべってるよ、ゆみ」

雄一「ええと、そうじゃなくて、どうしてそんな一日で……」

森医師「由美の脳自体は、昏睡状態にずっとあっても、ちゃんと成長を遂げていた、と考えるしかないね。不思議、つてまあ医者言う事じゃないけどさ(苦笑)」

由美「(にこにこ)いこ? ゆーいち、いこ?」

雄一「えっ? どこに?」

武蔵野の森

病院から出てきた二人。その後を私服に着替えた看護士が二人、遅れてついてくる。
トコトコとおぼつかないながら、しっかり歩いている由美だが――

由美「おんぶー」

雄一「(呆れ)ええ? だって由美はもう歩けるだろ」

由美「(むー)おんぶー!」

雄一「(後ろの看護士らをチラッと見て)むー……」

それを離れたところから無表情に見つめている、

斐川院長。

商店街

由美をおぶって歩く雄一。由美は看護婦の服を借り

て着替えている。

素足に触れている手が気になる雄一——、チラと後ろを見る。

やや後方を、ついてくる看護士。

雄一「そんなに信用ないかよ……」

流石に奇異に見える二人は、通行人達の注目を浴びている。赤ん坊を背負った若い母親とすれ違い——

雄一「（聞こえよがしに）ったく。まあまだ子どもだからしょうがないけどさあつ」

由美「やおやー！ おさかなやー！」

雄一「た、頼むからあんまし大きな声出さないでくれ……」

突如由美、体を揺らし始める。

雄一「おっ、おい何だよっ？」

バスが停留所に止まるところ。

由美「ばすー、ばすー」

雄一「そうそう、バス。あれはな、えーと、遠くに行く時に乗るんだ」

由美「ばすー、ゆみ、ばすー」

雄一「——」

そーつと後ろを見る雄一。

看護士、煙草を買っていた。

雄一「（小声）由美、バス乗りたいか」

由美「ばすー」

バス車内

後部窓から、必死の形相で走って追う二人の看護士が見えている。

由美「ばいばい、ばいばい！」

雄一「（窓から顔を出し）夕方までには帰りまーす！」

二人、手を振る。

窓にぺたりと手をつけて、流れる窓外の景色を見つ

めている由美。

雄一「——外の世界って、広いんだぜ、由美」

由美「（聞こえていないらしい）」

東京の街

実施され始めの歩行者天国となっている。

派手な色使い、中性的なファッションの若者ら、そこを歩く事自体が休日のイベント。

病院や商店街とはまるで世界が違う。

子どもの様に手を繋いでそこを歩く雄一と由美。

都市演劇の役者が奇態な姿で二人を覗き込む。

由美「あはははははは」

由美、雄一の手を離し、役者の真似をして奇妙な格好で歩きだす。

雄一「あつ、ちよつ、由美！」

追う雄一。

由美、ヒッピー・ルックのアベックの前に周り込む。

アベック男「あん？」

同女「何よこの子、知り合い？」

男「しっ、知らないよ」

じーっと二人の顔を交互に見ている由美。

アベックの男と女、肩を抱いていたのを解き、バツが悪くなつて離れる。

由美「なあんだ」

ぷいっ、と関心を失い歩きだす由美。

雄一「すいません、あいつ、未だ子どもなんです」

頭をペコツと下げて由美の後を追う雄一。

男+女「はあ？」

ビルを見上げて立ち止まっている由美。

雄一、追いついて

雄一「勝手に行くんじゃないぞ、全く目が放せないんだから。ほら」

手を差し出す雄一。素直に従う由美。

雄一「……」

自分の握っている掌の感触……。

雄一、ちよつとドキドキしている。が、由美はそんな事がまわらず、ブンブンと雄一の手を回したり。

と——、顔に落ちた滴に見上げる雄一。

俄か雨が降り始めた。

歩いていた人々、千々に足を早めたり、傘を差したりし始めて散り——。

雄一「ンだよ、ついてないな。由美、おいで！」

由美の手を引っ張り、店の軒先に雨宿りしようとしてくる雄一。

と、由美、するりと雄一の手から逃れ——

雄一「！」

由美、誰も歩いていない歩行者天国の真ん中に走ってきて——、空を見上げる。

雄一「何してんだ由美！早くこつち——」

降り注ぐ強い雨に顔を打たせ、気持ちよさそうに目を閉じ——、両手を広げて、くるくると回る。

全身に、この世界がくれる全てのものを受け入れるかの様に。

雄一は由美を見つめる。自分も雨に打たれながら。

由美、すつ、と雄一の方を見て微笑む。

雄一「——」

由美「（ややしつかりした口調）あたし、感じるよ」

雄一「——（乾いた声）え……」

由美「あたし、感じているよ、起きてるから。目が覚めてるから——」

由美、雄一の手を引っ張り、くるくると雄一を振り回して走らせる。

雨宿りをしてる人々、にこやかに二人を見物。

雄一「——（笑いだす）由美！」

由美「何？雄一」

雄一「おはよう——」

由美「(にこっ)おはよう!」

と、やや離れたところでポツリと傘を差し、立ち尽くしている少女がいた。

恵子「——雄一……」

恵子の脇には真美子と伊織。

真美子「(伊織に)シヨック……、だよね」

伊織「しっ」

二人、向こうへ手を繋いで駆けていく。

恵子「……」

公営住宅外観/翌朝

雨は止んで、団地と団地の間の広場には水たまりが朝日を照らしている。

S「一九七一年四月二五日」

S「三日目」

長沢家/キッチン

テレビのワイドショウが映っている。

画面内司会者「——これは現代の奇跡と言っても過言ではありません。せん。間もなく、武蔵野中央病院から生中継をお送りいたします」

欠伸をしながら、ワイシャツを羽織りつつ部屋から出てくる雄一。母親はスーツ姿で、鞆にパンフレットを詰めているところ。

律子「遅刻するぞ」

雄一「……」

テーブルの上の食パンをむさぼりつつ、ぼんやりとテレビを見る。

律子「あの病院、あんたが喘息で入院してたところよ」

雄一「(うつ)……」

律子「懐かしいね。じゃ、行ってきまー」

慌ただしく出ていく律子。

雄一「……………（テレビに見入っている）」

画面は武蔵野中央病院前に。報道陣が集まっている。レポーター「こちらは武蔵野中央病院前です。十七年前、飛行機事故で亡くなった母親から生まれ、その後一度も目を覚ます事が無かった、あの飯田由美ちゃんが——」

落ち着きを失った雄一、鞆を部屋にとりに飛び込んで、出てくるが——、どうしようと逡巡——、鞆をキッチン・テーブルに放り、飛び出していく。が、一度戻ってテレビのスイッチを切り、また出ていく。

武蔵野中央病院玄関前／テレビ画面の映像

テレビ画面の映像。玄関前で記者達を前ににこやかに立っている由美。

レポーター1「十七年ぶりに目が覚めてどんな気分ですか？」

由美、突き出されたマイクににこやかに

由美「眠っていた、っていう記憶は無いので、今、あたしは生

まれたんだな、って……………」

レポーター2「夢は見えていなかったんですか？」

由美「（小首を傾げ微笑むだけ）」

レポーター3「あの！言葉を覚えるのが随分早いんじゃないか

と思うんですけど？」

由美「本をいっぱい読みました。それに、看護婦さんや——、

先生とお話しもいっぱいしました」

アパートの一室

白黒テレビを食い入る様に見ている中年の女。

みつ「——目が覚めた……………、あの子が——」

あの時の、看護婦……………」

武蔵野中央病院玄関前／テレビ画面の映像

レポーター1「十七年ぶりに目が覚めて、何をしたいと思っ
ていますか？」

由美「（微笑み、俯く）」

レポーター2「お父さん、お母さんの記憶は全く無いんですか？」

由美「——（顔が曇る）」

国道筋のラーメン店

どこかの地方。国道沿いにある、バスを改造したラ
ーメン店。

ラーメン店内

厨房の中に立つ、無精髭顔の初老の男、呆けた様に
テレビを見つめている。

客（トラック運転手）「おっちゃん、早くしてんか。麺が伸びて
まうで」

飯田 肇「——由美……」

武蔵野中央病院玄関前／テレビ画面の映像

レポーター2「お父さん、失踪しているのをご存じでしたか？」

由美「……」

レポーター1「飛行機事故の記憶って無いんですか？」

由美、不安を顔に浮かべている。

レポーター3「あなたのお母さんは——」

と！ 急に画面内に飛び込んで来る雄一。

由美「『あ……』」

雄一「『来い！』」

由美の手を引っ張り、記者達の前から連れ去ってい
く雄一。

レポーター3「あっ、ちよつと！」

レポーター2「あなた誰なんですか？」

レポーター「えー、ただいまアクシデントがありました」

カメラ、逃げていく二人を追って振ると、見物していた入院患者が映る。

田所「(ニヤニヤ)やるねえ……」

武蔵野の林

由美の手を引つ張り走る雄一。

由美「(笑いながら)雄一？」

雄一「いいんだ、あんな奴らなんか構わなくなつて」

歩調を緩める雄一。

二人、手を繋いで歩く。

雄一「けどさ、ホントに凄い進歩だよな。昨日までは幼稚園くらいだと思つてたのにさ。あんなに喋るんだもん、十七年も眠つてたなんて誰も信じないぜ」

由美「――」

雄一「俺だつて、信じられない事がある……。だつて由美はお父さんを見てない筈だろ？　なのに絵を描いた……」

由美「見てたの……」

雄一「え……？」

由美「眠っている間に、見ていたの。覚えてないけど、きっとそう。そういう風にしてくれたの……」

雄一「……『誰がだ……？』」

穏やかな木漏れ日の中――。

由美、チラッと雄一を幾度か見て――、そつと手を離す。

雄一「？(振り向く)」

由美、俯いていた。

雄一「由美？」

由美「――」

泉の畔

木々を抜けて出てくる二人。泉を見つけて由美、顔を輝かせ、駆けていく。

雄「——」

由美、泉の畔に屈んで、水面に掌をつける。

雄「——未だ——冷たいだろ？」

由美「——冷たい……。冷たさ……」

雄「——冬はもつと冷たいんだ」

由美「——あたし——、未だ何にも知らない……」

雄「——」

由美「——どうして、目が覚める事が出来たのかな、あたし……」

雄「——え……」

由美「（微笑）——お父さんも——、お母さんもいなくなってしまうたっていうのに——、あたし一人ぼっちなのに、どうして今、目が覚めたのかな……。おかしいよね、あたし。まるで蝉みたい。ずとずと、眠ってるだけだったなんて——」

雄「——多分……」

由美「え？」

雄「——待ってる人がいるから、目が覚めたんだよ」

由美「——（微笑）そう、なのかな……」

雄「——、由美の唇を見つめる。」

今はとても遠く、手が届かないもの——。

雄「——俺——」

由美「二日、しかないの」

雄「——？」

由美「あと、二日しかないの、あたし」

雄「——（当惑）何が二日だった？」

由美「起きていられるのが。あたしには、五日間だけ、目を覚ましていって許されたの」

雄「——何言ってるんだよ？ 何だよそれ……。五日だけ？（段々腹が立つてくる）誰だよ、誰がそんなこと許すとか許さないとか決めるんだよ」

由美「——誰だったか……。思い出せない……。あたしが眠っている時……。でも、あたしの思い込みかもしれない」

雄「そうに決まってるよ！」

由美「でもね、雄——、君……」

君づけで呼ばれた事にややショックを受ける雄一。

雄「え……」

由美、何をを言いかけ——、口を閉じる。

黙ってそのままにいる二人——。

林の出口近く

病院がもう見えているところまで、戻ってきた二人。

若い看護婦、二人を見つめ

看護婦「(建物の方に)あつ、戻ってきましたあ！」

嘆息する雄一——。

由美「(ポツリと)だから、あたし急いでいるの」

雄「え……?」

由美「この世界の事、全部知りたいけど、そんな事無理……」

でも——、今思っている気持ちだけは——、あたし、ち

やんと——」

由美、苦しそうにそれだけ言って沈黙。

雄「——気持ち、って……」

由美「胸が——、痛い。この気持ちって——」

雄「(まさか……)」

じつと雄一を見つめる、真剣な由美の目。

由美「——(俯き)お姫様は、王子様のキスで目覚めて——、

そして——」

雄「(激しいショック)——聞こえて、たの……?」

由美「あたしには、時間が無いって言ったでしょ? あたし、

この気持ちって——(混乱)」

雄「それは——、好きって、いう気持ち……」

由美「愛しているの」

雄「——!」

由美「愛、だと思っの」

雄「——、動悸を抑えられない。

由美「あたし——、院長先生の事考えると、あたし——」

目の前が真っ白になる雄一。

公団アパート／雄一の部屋／夕刻

床にぺたりと座り、脱力している雄一。

もう一時間もただそうしていた。

ボタン。鉄扉を開き律子が帰って来る。

律子「（オフ）まー」

雄一「……」

律子、買い物袋を置いて、テレビを点ける。

夕刻のニュースの時間。

アナウンサー「——ていました、昭和の眠り姫、飯田由美さんは

」

いきなり雄一、飛び込んできて乱暴にスイッチを切ってしまう。

律子「——なに……」

雄一「——」

雄一、一瞬乱暴な所作をした事を後悔するが——、ムツとしたまま居間の椅子に座る。

律子「——あんたが入院していた時——」

雄一「——何……」

律子、小さく嘆息し——、と、電話が鳴る。ややして、面倒そうに

律子「長沢ですけれども——。——はい？ あ、はい、ちょっと待ってね。（受話器を抑え）雄一」

雄一「——」

律子「（大声で）ゆーいちーっ」

雄一「何だよ近くにいないじゃないか」

律子「なら返事しろ。クラスの溝口さんだって」

雄一「（ハッ）——溝口、恵子……？」

雄一、立ち上がって受話器を受け取る。

雄一「（やや躊躇い）——もしもし……。え？（窓の方を見て）

今どこ？」

公園アパート／広場／夕刻

団地群の中央にある広場。電話ボックスの脇に立っていた恵子、走ってきた雄一を見て笑顔を見せる。

雄一「やあ」

恵子「ごめんね、急にきて」

雄一「いいけど——、何？」

恵子「見たの、テレビ」

二人、暫く黙る。

雄一「——俺、小学校ン時、喘息持ちでさ、一カ月くらい入院してた事あつて——。あの病院だよ」

恵子「……」

雄一「由美——、あいつはそんな時もずっと眠っていた。俺、ガキだったからさ——、その——、真に受けたんだ。王子様がキスをすれば目が覚める、って……」

恵子「……」

可笑しくもないのに雄一、笑いながら

雄一「ホント、ガキってしょうがないよな。退院しても、毎週毎週日曜ンなると、あの病院に行つて——、由美に……」

恵子「（被つて）あの！——さ……」

緊張して言葉を待つ雄一。

恵子「こないだのつて、あたし、ファースト・キスじゃなかったんだ」

雄一「えっ……？」

恵子「（目を逸らし）——中学ン時さ、好きな先輩がいて。卒業式の日——、キスして貰ったんだよね」

雄一「……」

恵子、泣き笑いの顔に——。

雄一、見ていられなくなる。

恵子「——雄一も、そうだったんだね。だから——」

雄一「——」

恵子「こないだの事なんか全然気にしなくっていいからさ。雄

「の——キスは——」

懸命に笑顔を作ろうとしていた恵子、堪えきれず泣きだす。

雄「——」

恵子の気持ち、知らなかった訳じゃなかった。それなのに、見ないフリをしていた。自分の残酷さに呆然となる雄一、うなだれる。

恵子「（また、必死に笑顔を作り）嫌だ——、あたし——、こんな顔、見せに来たんじゃないのに……」

また、涙の衝動を感じた恵子、サッと駆けだす。立ち尽くしていた雄一——、決意の顔に。

武蔵野中央病院前／夜

報道の車両も捌けて、静まっている敷地。

雄一、歩いて来るが、入院病棟とは反対側に向かって歩いていく。

院長室

堆く積み重ねられた英語の論文や書籍の机。そこで書き物をしていた斐川。

ギツ。背後でドアが開くのに気づき、振り向く。

斐川「——君か」

雄一、固い顔で立っている。

斐川「（前に向き）何か言ったのか？」

雄一「——」

斐川「飯田由美は外出から帰ってきてから、情緒が不安定になっていた。何か言ったのか？」

雄一「お願いがあります」

斐川「何だ」

雄一「——由美と、結婚して下さい」

斐川「——」

ゆっくりと、再び雄一の方を向く斐川。

斐川「何だつて？」

雄一「（必死に自己を抑え）——由美は、斐川先生の事を——愛しているんです。いや、そう思ってるだけなのかもしれないけど——、でも、今の由美の気持ちは——、（苦渋）本気なんです」

斐川「——」

雄一「あいつ、自分が五日間しか起きてられ無いつて言うんです。誰かに眠ってる間にそう言われたつて。そんな事、絶対信じられないけど——、でも——」

斐川「——（小さく嘆息）——」

雄一「——由美と——、結婚して下さい。幸せにしてやって、下さい」

斐川「——君は信じているのか？」

雄一「え？」

斐川「由美に五日しかないなどと、そんな非合理的な事を」

雄一「（苦痛）」

斐川「由美の精神的成長は把握不可能な程に早い。おそらく思春期になったところなんだろう。由美の今の情緒は——」
雄一「そうじゃない！ そうじゃないんだつて！ 由美は、本気で先生の事を想つてる！」

斐川「やめたまえ。私は医師だよ。そんな事も理解出来ない程幼いのかね、君は」
背を向ける斐川。

雄一「——」

暗澹たる気持ちで、部屋を出ていく雄一。

同／廊下側

ドアを開けた雄一——、驚愕。

雄一「由美——」
手に、手作りの小さな花束を胸に抱えた由美、紙の様に白い顔で立ち尽くしていた。

部屋の中では、雄一の声聞いた斐川が苦悶の表

情を浮かべている。

由美「——」

ポロポロと涙をこぼす由美——。

雄「聞いて、た……」

ポトリと花束を落とし——、フラフラとその場から走り出す由美。

雄「——（うなだれる）」

と、部屋から出てくる斐川。

斐川「危険だ。今一人にしては——」

雄「（ハッ）」

武蔵野の林ノ夜

雄「由美——ッ！ 由美——ッ！」

暗い森の中を走る雄——。

途方に暮れた顔で、見回すが、由美の姿は無い。

雄「由美——！ 由美——！！」

立ち止まり——、ガックリとなる雄——。

ハッ！ まさか——

高台の公園

ハア、ハア、ハア、息を切らし、必死に走ってきた雄——。

雄「—— 由美！」

展望台の様に開けた、手すりの前にフラフラと不自然な態勢で立っている由美。

雄「由美！」

既に駆けだしている雄——。

由美は泣いていた。「いやだ」と首を振りながら、手すりに手を掛けている。

眼下には、民家や街灯の灯が瞬いている。

雄「由美——」

ガツと由美の肩に手を掛け引く雄一。
由美「やだあああつ！」

雄一から逃れようとものがき、手すりの方へ手を伸ばす由美。

雄一「どうしてなんだよ！ どうしてそんな——」

由美「やだ——、やだ……（徐々に消え入る声）」

由美、震えている。

雄一「——」

雄一、由美の体をしっかりと抱く。それしか、彼に今出来る事はない——。

由美「——（極く小さな声）あたしには、時間が無い……」

雄一「——」

じつと佇む二人——。

由美の病室 / 翌日朝

虚ろな顔でベッドで半身を起こしている由美。
全てを拒絶しているかの様な顔——。

S「一九七一年四月二六日」

やや離れて、為す術無く立ち尽くしている雄一。

雄一「——」

S「四日目」

由美の唇が、極く、極く僅かに動いている。

雄一「『え……？』」

耳を澄ます雄一。

吐息の様に小さな由美の声——。

由美「——王子様のキスで、眠り姫は目を覚ましました……」

苦しい顔の雄一、いたたまれず部屋を出ていく。

廊下

出てくる雄一——と、やや離れたところでおおずと立っている女性に目を留める。

雄一「——あ……」

それは、福原みつ。あの時の看護婦。

武蔵野の林

バス停までみつを送る雄一。二人、歩く。

雄一「——それに、不思議な事は他にもあって——、ああ、そう。見た筈の無いお父さんそっくりな絵を描いたんです」

言って雄一、振り向く。

みつ、立ち止まって思索していた。

雄一「せっかく、久しぶりに来たのに、由美があんな状態——、俺のせい、ですね」

みつ「不思議は、無いです」

雄一「？」

みつ「不思議は無い、気がするんです。由美ちゃんが落ちるっていう事を怖がったり、お父さんの絵を描くの——」

雄一「——どういう、事ですか」

みつ「あの、あたし由美ちゃんの担当をしていた時、毎日話しかけてました。もちろん、起きてくれないかなって気持ちで……。お父さんが由美ちゃんの事で走り回ってる内に、事業に失敗なさって——、来なくなってから、あたし、毎日お父さんの写真を由美ちゃんの顔の前に見せていたんです」

フラッシュ／由美の病室

未だ若いみつが、幼い由美の顔の前に筆の写真を見せながら、明るく話かけている。

武蔵野の林

雄一「——」

みつ「お父さまは由美ちゃんを見捨てた訳じゃない、どこかでいつも由美ちゃんの事思ってるって……。だって本当に、滞り気味ではあっても、毎月病院に送金されてましたか

らね……」

雄「由美は眠っている間に、言葉を聞いてたんだ……。目を閉じていても——、お父さんの顔も見ていた……」

みつ「——（言い淀む）あの……。由美ちゃんが斐川先生を」

雄「（固い顔）」

みつ「どうして好きだって思っているのかも——」

雄「え……」

みつ「——（嘆息）——、雄一君、退院しても暫くは毎週通つて——、由美ちゃんに——その……」

俯く雄一。

みつ「あの、いえそれはいいんです。素敵な事だって思ってた。本当に子どもの純粋な気持ちで……」

雄「——」

みつ「でも——、雄一さんが来なくなっても、それは続いている……」

雄「——（当惑）え……？（どういう意味だ？）」

みつ「悪戯半分だったと、思うんですけど——、斐川先生が、夜になると……」

激しい衝撃を受けている雄一。

雄「（乾いた声）斐川、先生が由美に……」

みつ「あたし、見てしまって……。それであたしあの病院……」

ダツ！ 駆けだす雄一。

みつ「あつ！ 雄一さん！」

言った事を後悔しているみつ。

院長室

バン！ 肩で息をしてドアを開け放つ雄一。

斐川は電話を掛けていた。

斐川「（ドイツ語）遷延性意識障害——、そうですか。その患者にはどういう処方をしました？（チラと雄一を見る）」

雄一「（怒りで視野狭窄となっている）あんたが——」

斐川「（手で制してノドイツ語）なるほど。それは論文になっているのなら是非読ませて戴きたい」

ツカツカと斐川の前に進み――

雄一「あんたがそんな事をしたからなんじゃないか」

斐川「！（激しい狼狽ノドイツ語）あ、あのまた後で――」

ガン！ 斐川の頬を殴りつける雄一。

斐川「あぐっ！」

電話線と共に転げ、机の下に崩れる斐川。

雄一「あんたがっ――あんたがどうしてそんな事したんだよ！

あんたは医者じゃないか！ 由美はあんたの患者じゃないか！

斐川、崩れた姿勢のまま動かない。

雄一「――」

斐川「――そうだよ……。由美は親も見捨て、いや神にだって見捨てられたんだ。それを――私だけが――」

斐川の声は嗚咽にむせている。

真っ赤になった顔は歪み、涙でぐしゃぐしゃになっていた。

雄一「（慄然）」

斐川「この私が無力だなんて認めたく無かった……。あの時に出来た事は全て試みた。それでも由美は――」

子どもの様に泣きじゃくる斐川。

暗然と立つ雄一――、出ていく。

泣き続ける斐川――。

由美の病室

見上げている由美。

雄一「行こう」

由美「……」

由美を手を引き、ベッドから立たせる雄一。

無気力に、されるままの由美。

武蔵野の林

いつかの様に、手を繋いで歩く二人。

しかし今は二人とも唾し黙る。

由美、不安気に雄一の顔を見て、何かを言い掛けるが、強張った雄一の表情を見て黙る。しかし――

由美「――！」

高台の公園

林を抜けて、二人が出たのは、あの公園。

当惑する由美の手をぐいぐいと引っ張って、雄一は展望台の方へ向かう。

由美「――（小声）やだ……」

雄一「……」

由美「――やだっ」

雄一「……」

由美「やめて！あたしやだああ！」

雄一、ガツと由美の肩を掴む。

雄一「何を怖がってたんだよっ！」

由美「あたしは、落ちたのよ」落ちて、お母さんと――」

雄一「それは！ 由美が本当に覚えてた事なんかじゃない！」

由美「ん？」

雄一「お父さんの顔だとか、みんな、由美が眠ってる間に誰かが喋ったり見せたりした事で！ それを由美は眠ってる間に聞いてただけなんだ！」

由美「――（違う、と首を振り）あたしはずっと、海の底みたいなところでじっとしていたの。今はここにいます。でも、また……」

雄一「（違う！と首を振り）不思議な事なんて何にもない！」
暫く黙る二人――。

由美「斐川先生はあたしを愛してくれてるって、ずっと思ってた。だって――、あたし、ずっと前から――」目を覚まして、『、っていうお祈りの声を聞いていたんだもの。そのお祈りと一緒に――、とっても、とっても暖かい感じが――」

由美は自分の唇をそっと抑えた。

雄一「——」目を、覚まして『……』

それは雄一の祈りの言葉。聞こえていたのだ、由美には——。しかし由美はそれを、院長のものだと信じている。それを言葉で否定する事なんて出来ない。雄一は目に涙を浮かべていた。もう、どうしたらいいのか判らない。こんなに愛おしい由美がすぐそばにいるのに、遠く離れている様に感じられているのだ。

雄一は黙って、そっと由美の両肩に手を掛ける。

由美「『え？』」

雄一、ゆっくりと顔を近づけ——、

由美「……」

目を開いたまま、近づくと雄一の顔を見つめている。

雄一は、キスをした。

そっと、優しく——。

由美「——！（息を呑む）」

フラッシュ

子どもの頃の雄一が、本当に純真な気持ちで、眠れる由美にしてきた事——。祈りを込めた——キス。キス——、キス——、キス——。

高台の公園

見開いた由美の目が見ると潤んでいく。判ったのだ。

この感触——。この、暖かい感触——。

高鳴る胸。頬を伝う涙。

由美、そっと雄一の顔を抱く。

由美「『ああ！』」

雄一だったのだ。由美を目覚めさせる祈りを捧げ続けていたのは。

由美「どうして、あたし——、雄一君だって——」

顔をくしゃくしゃにして泣きだす由美。

雄一、頷く。

雄一「『そうだよ、由美』」

言いたい事もどかしくて言えず——、雄一に自ら

口づける由美。何度も、何度も。

戸惑っていた雄一も、判ったのだ。

由美「目を、覚まして——、僕が、王子様……」

雄一も泣いている。力いっぱい、由美の体を抱きしめる雄一。抱きしめて、由美と、自分の生を感じる。そして、二人は、互いに求め合うキスを。

不慣れで、ぎこちなくて、でも、この世で最も美しいキス——。

公団アパート／長沢家

鉄扉が開く音。

律子「(おかえ)りー……い？」

雄一の後から、おずおずと入って来る由美。

律子「(当惑した笑み)こんばんは？」

微笑し、ペコツと頭を下げる由美。

律子、由美を見つめていたが——

律子「ご飯、ちゃんと作んなきゃいけないわね。あ、おかず、ろくなもん無いかも。ちよつと待ってて、あたし——」

雄一「お母さん、俺、明日、結婚するから」

律子「……」

ニコニコしている由美。

公団アパート外観／夜

居間

ソファで毛布を被っている雄一。眠れない。眠れる筈が無い。

と、奥の襖が開いて律子が手に着物を畳んだものを

手に出てくる。

律子「虫干ししてなかったから、湿気てる……」

雄一「服なんて、なんだっていいよ」

律子「——（固く、はつきりと）良くないわよ」

律子の語調の強さに、チラと自室の方を気にする。

雄一「——」

律子「簡単に言うんじゃないわよ。そういうもんじゃないって

事くらい、男のあんただって判るでしょうが！」

雄一「——御免（頼むから静かにして欲しい）」

律子「御免とかそういう事じゃないでしょう……ちゃんとしなきゃいけない事なのよ！ 友達だけ集まればだとか、そんなに簡単にやっていい事じゃないのよ！ 新町の姉さんがいたから教会だって無理聞いて貰えたんじゃない！ 二人だけの事じゃないのよ、結婚ていうのは！」

雄一「——」

律子「——あたしだってさ……、未永く、って結婚、したかったわよ……」

雄一「——」

律子「——どうしても——、明日じゃなきゃ……」

雄一、ちゃんと母親の目を見て、頷く。

律子、小さく嘆息し、雄一の部屋の方を見て自己嫌悪を感じる——。

雄一の部屋

ベッドに座っている由美。眠ってはいない。

そう、この四日の間、由美は一度とて眠っていないかった……。

ふと、雄一がいつも見ていたカレンダーを見る。

起きてからの五日間の柀目に線が。

じっと見つめていた由美の目に、涙が浮かぶ。

ずっとこのまま起きていたい——。

教会 / 翌日午前

公団住宅の近所に建つ、小さな教会。

雄一の同級生達が三々五々、駆け込んでいく。

S「一九七一年四月二十七日」

S「五日目」

同ノ礼拝堂

牧師の前に立つ雄一。

礼拝堂内には、ぎっしりとはいかないものの、雄一の級友や婦長や森医師、やや離れて福原みつ。若干の親戚筋などが祝福の為に集まっている。

振り向く雄一、一弘や隆達が手を振っている。

苦笑する雄一——、恵子の姿を目に留める。

精一杯のよそ行きを着た恵子、笑顔を向けてくれている。

雄一「——」

一弘「おっ、来たぞっ」

礼拝堂後ろの階段から、真っ白なウエディング・ドレスを着た由美が、和装の律子の介添えで降りて来た。

雄一「（目を奪われる）」

教会外

放送局の車、ハイヤーが集結。

テレビ屋「急げ！」

16ミリカメラを担いで飛び込んでいくカメラマン。慌ただしい敷地外側には、近所の人達が野次馬となつて集まっている。

主婦1「見えたわよ！ ほらほら、あの子でしょ！」

主婦2「綺麗ねえ……」

その野次馬の、やや後方からじつと教会内を見つめている男がいた。

薄汚れた、しかしそれでも彼にとつては唯一のジャ
ケットを着た、飯田肇、由美の父。

肇 「——由美……」

チラリと純白のドレス姿が見えた。

見つめている肇、涙ではつきり見えない。

肇 「ちきしょう、肝心な時に見えない……（苦笑）」

オルガンの音が小さく聞こえてきた——。

そつと野次馬の列から離れる肇。

俯いていたが——、泣き笑いの顔になり、ウンウン
と頷きながら、背を丸めて歩き去っていく。由美の
幸福を願いながら。

礼拝堂

式が終わり、やや混乱気味の場内。

律子は親戚にペコペコ頭を下げて挨拶。

後方ではテレビ局員が由美に大声を掛けて撮影しよ
うとしている。

雄一は、クラスの仲間に囲まれ小突かれたり。

恵子、由美に紙袋を渡す。

由美 「（微笑）」

恵子 「あたしのお古だけど、服あげる。持ってないでしょ？」

由美 「——ありがとう」

雄一、振り向く。

恵子と目が合う。泣き笑いの恵子——。

同／二階

牧師の勉強部屋が新婦控え室となっていた。

部屋には場違いな程、いっぱいの花束。

そして、ポツリと椅子に腰掛けている由美。

律子の声 「（階下より）本当に突然ありがとうございました」

階段を上がってきた律子——

律子 「さてと、このお花、どうやって持っていかしらね」

微笑んでいる由美。

律子「あら、雄一は？」

由美「日が暮れるまでには戻って来るから、って」

律子「ええっ」あの子、どこ行ったのよ」

由美「……（判らない、と小首を傾げるだけ）」

律子「——まったくあの子は……。旅行の支度だつてあるのに」

式の前からずっと緊張していた律子、ふう、と脱力。

暫く黙っていた二人——。

律子「あの子が喘息で入院していた時にね——（思い出し笑）」

由美「——？」

律子「あなたの病室に通つてるっていうの、あたし知つてた。

——感染る病気じゃないけど、でも、良くないよね……。

でも、あたしは止めなかった。止めたくなかった……」

由美「——」

律子「これも母親のエゴって奴かな（自嘲）——ずっと一緒に、

いてやってね、由美さん」

由美、一瞬やや戸惑いの色を目に浮かべるも、微笑

んで頷く。

武蔵野中央病院

同/院長室

段ボールに私物を片づけている斐川。

ノックの音がする。

斐川「はい」

入つて来る、花婿姿の雄一。

やや驚きの顔となるが——

斐川「（目を逸らす）——おめでとう、と言うべきだろうな」

いきなり頭を下げる雄一。

斐川、驚愕。

雄一「——教えて下さい。由美が言つてる事って、本当なんで

すか。五日間しかないだなんて、あり得るんですか」

雄一の苦しみを悟る斐川。

斐川「——由美のケースを、私は一度たりとも諦めた事は無か

った。医者としての努力を——君は信じないだろうかね」

雄「——」

斐川「医学は常に進んできた。ドイツで似た症例があると聞いてね——」

斐川、分厚い英文の論文を示す。

斐川「やはり、眠っていた間の事を記憶していたんだそうだ。

由美は眠っている間にも、話しかけて来る者の言葉を全て無意識に記憶していたんだと思う。それは、君の事でも明らかだ」

雄「——（緊張を解いた顔）そう、なんですか……」

斐川「五日間というのも、恐らく誰かの違う意味の言葉だったんだろう」

雄「——思い込み、みたいなものですか」

斐川「（頷き）暗示、というものだ。ただし由美にとってそれは真実になつてしまっている。それを信じている限り」

雄「——どうしたらそんな事、信じさせない様になるんですか」

斐川「——（弱々しい笑み）祈りじゃないのか？ 君が、目覚めてほしい、と込めた祈りが通じたんだからね」

雄「——」

斐川「早く花嫁のところに戻りたまえ」

雄「——深く礼をして、走り出ていく。

暫し放心していた斐川、片づけを再開する。

夜行列車内

街の灯が遠く。

冷たい窓に掌をあて、外を見つめている由美。

由美「世界って広いんだぜ」

苦笑する、隣に身を寄せる雄「——」

疎らな客。南に向かって走る列車。

前の席には駅弁とお茶。

由美は、恵子のくれた服を着ている。

雄「——全部、覚えてるんだな」

由美「——（くすっ）」

雄一「なに」

由美「——あたし、最高に幸せ」

雄一「『俺だつて』——」

由美「だつて、最高の人生を送れたんだもの。一番あたしを愛してくれる人と結婚出来たんだもの」

雄一「幸せは、これからだ」

由美「（柔らかく否定）——言つたでしよ。あたしには五日間だけ、許されたんだつて」

雄一「——そんな事！」

斜め向かいでウトウトしていた乗客、訝し気に薄目で二人を見る。

雄一「（小声になり）信じるなつて」

由美「神様つて、信じる？」

雄一「そんな目茶苦茶な事言う神様なんて、俺は信じない」

由美「神様かどうか、あたしにも判らない。でも、何かこう、宇宙に大きな力があつて、あたしに囁いたの」

雄一「不思議な事なんて無いんだ。言つただろ？ 全部由美が眠つてる間に誰かが言つたり見せたりし——」

ハツと腕時計を見る雄一。

午前0時が近づいている。

雄一「（愕然）」

由美「雄一も、神様にお礼言つて（微笑）。だつて、雄一のお祈りが通じたんだもの。信じないなんて言つたら、叱られるよ……」

目をゆつくりと閉じていく由美。

雄一「（身を起こし）由美！」

由美、微笑したまま目を閉じた。

雄一「由美！ 眠るな！ ずっと一緒なんだから」 由美「」

由美「——あたし……、しあ——わせ……」

昏睡する由美を揺さぶる雄一。

雄一「嘘だろ……？ こんなもの、こんなもの……」

由美は、再び眠れる乙女となった。

雄一「（嗚咽）由美……」

城南大学病院／研究室

最新の電子顕微鏡のモニタを診ていた初老の医師、目をしばたたかせ、スイッチを切る。

同／廊下

扉を開け、出てきた研究医、鍵を締めて歩きだす。

大学構内

歩く研究医。学生が挨拶すると、微笑し手を振る。

S「一九九九年四月二九日」

研究医、門の外へ――。

マンションの一室／リビング

鉄扉を開け、コンビニの袋を抱えた医師が帰ってきた。荷物をキッチンに載せ――

雄「（ただい）ま。もう××が咲いていたよ。今年は暖かかったからね」

寝室

入って来る雄一。

ベッドには――、歳相応になっている由美の眠る姿。

雄「今日は柴田君が来てくれたんだよ。覚えてるだろう？ 五年前、いや、六年前だったかな。私の研究室にいた子

さ。もう結婚してね――、そうだった」

一旦閉じた筆筒を開け、上着のポケットから一葉の写真を出す雄一。

雄一「もう子どもが出来たってさ。（苦笑）わざわざ写真を持ってきてくれた」

雄一、写真を由美の寝顔の前に持っていく。

雄一「ほら、可愛いだろう？」

いつもの様に、写真を見せている雄一、だが――

雄一「（眉を顰める）――由美？」

写真を脇に置き、由美の鼻に耳を近づける。

雄一「……」

固い顔で、由美の手を布団の中から出し、医師らしい手つきで脈をとる。

雄一「――（長い沈黙）」

そつと布団の中に腕を仕舞う雄一。

由美の体の脇に腰を下ろし――

雄一「――先にいつてしまうなんて――」

うなだれる雄一。

雄一「――ずるいじゃないか……」

リビングノそれから数日した夜

そこから見える寝室の由美のベッドは、空。

雄一は、テレビの前に座っていた。

ビデオデッキがテープを再生している。

画面に映っているのは――、昔のワイドショーの録

画映像。音は出していない。

病院前の記者発表。

にこやかに答えている由美。

美しく、純粋なままの由美。

雄一「（モノ）由美は、私の希望で解剖にふされた。頭蓋を取り除いた時、私たちは由美の脳が、ガラスの様に透明で美しく、つややかなのを見た。たったの五日間だった由美の人生は、きつと誰よりも幸福だったと、思う……」

由美を記者の前から略奪する、若々しい雄一。由美は笑顔をカメラに向けながら、走り去っていく――。

涙を溢れさせながら、今の雄一は、由美の笑顔を見つめ続けている。

終